

東北大学実践宗教学寄附講座 ニュースレター

Department of Practical Religious Studies
Graduate School of Arts and Letters

第5号 2014年5月1日

目次

- 第2回臨床宗教師フォローアップ研修のご報告・・・7-10
頁
- 第4回臨床宗教師研修報告・・・・・・・・・・11-12頁
- 第4回臨床宗教師研修受講者の感想・・・・・・・・13-17頁
- アメリカ視察報告
- 「チャプレンと臨床宗教師」（高橋原）・・・・18-19頁
- 修了生の活動・各地の動き・・・・・・・・・・20-21頁

特別寄稿

鍋島直樹（龍谷大学教授）

龍谷大学大学院「臨床宗教師研修」を
始めるにあたって・・・・・・・・・・2-3頁



特別寄稿

河原正典（爽秋会岡部医院医師）

大切にしたいことは何ですか・・・・・・・・4-6頁



臨床宗教師会の発足について

2014年3月4日、5日に、第二回臨床宗教師フォローアップ研修が行なわれたのを機に、宗教者の立場からの心のケアに関心を寄せる諸機関、諸団体の代表者達が集まり、「臨床宗教師会」を発足させることで合意した。これはアカデミックな性質の学会ではなく、また、多数が存在する類似団体に新たに一つが加わるというのでもない。同じ志を持つ宗教者同士が、情報やノウハウを共有し、お互いに高めあっていくためのネットワークを作ろうという試みである。言うまでもなく、ここでの「臨床宗教師」とは一般名詞としてのそれであり、東北大学実践宗教学寄附講座と排他的に結びつくものではない。さしあたり、当講座が連絡役となることとし、定期的に（おそらく一年後に）、今回同様の研修と交流の場を持つことを決めたが、それ以外の活動については未定であり、様々な可能性に開かれている。運動のイニシアティブは、ケアに関わる一人一人の宗教者の手にあるものであろう。主旨に賛同される方々は是非とも声をかけていただきたい。多くの知恵が集まって、これが、公共的な空間でスピリチュアルケアを提供することができる、広い意味での臨床宗教師が日本社会に受け入れられていく一つのステップとなることを期待したい。



2014年5月 実践宗教学寄附講座

龍谷大学大学院「臨床宗教師研修」 を始めるにあたって



龍谷大学文学部教授 鍋島直樹

1. 東北大学大学院・実践宗教学寄附講座の創設の意義

2012年4月、東北大学大学院文学研究科は、布教伝道を目的とせず、時には宗教的背景の異なる者が協同行う宗教的ケアが被災者に勇気を与えてきたことを踏まえ、苦難にある人々の「心のケア」を実践する宗教者「臨床宗教師」を養成する大学院教育プログラム「実践宗教学寄附講座」を開設した。主任の鈴木岩弓教授は、「宗教者として全存在をかけて人々の苦悩や悲嘆に向き合い、そこから感じ取られるケア対象者の宗教性を尊重し、公共空間で実践可能な「宗教的ケア」を学ぶことを目的としている。」（「実践宗教学研究科設立の目的と役割」、東北大学大学院文学研究科、2012年4月）と明示している。こうした宗教学者の取り組みは、宗教者の災害支援活動をバックアップする原動力となり、日本に新たな幕を開いた。

2. 龍谷大学大学院・「臨床宗教師研修」開設の経緯

東北大学大学院実践宗教学寄附講座の開設目的は、龍谷大学大学院実践真宗学研究科の理念と方向を同じくしている。加えて、東北大学では、「臨床宗教師」の認証を一大学で独占せず、「臨床宗教師」を全国で養成してほしいという志願があった。その想いに龍谷大学の教員は心動かされた。東日本大震災以降、社会で受け入れられた「臨床宗教師」の認証を尊重し、龍谷大学大学院においても「臨床宗教師研修」を実施できるよう着手した。谷山洋三准教授による特別講義「東北大学大学院実践宗教学寄附講座における臨床宗教師研修の目的」（2013年5月27日）、国際シンポジウム「実践伝道学とチャプレンシー 人間の苦悩に向き合う仏教の慈悲(Practical Ministry and Chaplaincy:

Buddhist Compassion in Response to Human Distress)」、上智大学の島蘭進教授を囲んだシンポジウム「現代社会の苦悩に寄り添う」等を開催し、臨床宗教師研修の目的や、仏教チャプレンシープログラムの意義を学んだ。2013年第4回臨床宗教師研修にオブザーバーとして参加させていただき感動した。スタッフも研修者も感情を大事にして、相手が胸襟を開いて話すのを待っていた。悲しい現実の中で笑いがあふれていた。自分自身を知る研修となった。

2013年3月以降、龍谷大学大学院実践真宗学研究科の教員は、東北大学を度々訪問し、鈴木岩弓教授、谷山洋三准教授、高橋原准教授、実践宗教学寄附講座運営委員会の皆様から教示を受け、協力を得ながら、龍谷大学大学院においても、2014年4月から「臨床宗教師研修」を開設するに至った。

3. 「臨床宗教師研修」における具体的目標

龍谷大学大学院の「臨床宗教師研修」は、東北大学大学院の「実践宗教学寄附講座」と目標を同じくし、次の五点の習得をめざす。

- ①「傾聴」と「スピリチュアルケア」の能力向上
- ②「宗教間対話」「宗教協力」の能力向上
- ③自らの死生観と人生観を養う
- ④宗教者以外の諸機関との連携方法を学ぶ
- ⑤幅広い「宗教的ケア」の提供方法を学ぶ

「臨床宗教師研修」では、これらの目標をめざして、研修生を対象にロールプレイ、グループワークなどの実習と講義を行い、研修生は、自己の役割と課題を見つめ直す。研修生もスタッフも、東北大学大学院実践宗教学寄附講座運営委員会の「臨床宗教師倫理綱領」を遵守する。



4. 臨床宗教師研修の受講資格、カリキュラム概要

(1) 受講人数 5名～10名

(2) 受講要件 信徒の相談に応じる立場にある者。
あわせて、次に該当する者。

- ①本研究科に在籍する者（二年生以上）
- ②本研究科を修了した者（特別専攻生・修了生）
- ③大学卒業者で大学院生と同等の資質があると実践

真宗学研究科が認める者

(2015年度より応募要件の枠を拡大予定)

(3) 履修カリキュラム

<必修科目>

「臨床宗教師研修」に特化した講義	
①臨床宗教師実習	通年集中2単位2年次 配当
②グリーフケア論研究	半期2単位2年次配当
③ビハラー活動論研究 (講義の一環として、有識者 を招いた特別講演会を開催)	半期2単位2年次配当

<選択科目(推奨科目)>

2科目4単位以上を修得すること

「臨床宗教師研修」に関連した講義	
①現代宗教論研究	半期2単位1年次配当
②宗教心理学研究(宗教者間 対話)	半期2単位1年次配当
③宗教教育学研究	半期2単位1年次配当
④真宗人間論研究	半期2単位1年次配当
⑤生命倫理論研究	半期2単位1年次配当
⑥人権・平和論研究	半期2単位1年次配当 (隔年開講)
⑦カウンセリング論研究	半期2単位2年次配当
⑧地域活動論研究	半期2単位2年次配当 (隔年開講)
⑨臨床心理学研究	半期2単位1年次配当
⑩精神保健学研究	半期2単位1年次配当 (隔年開講)

※臨床宗教師実習の概要

- ・「臨床宗教師研修」に関するシンポジウムならびに特別講義に参加し、学内外の有識者の経験と知見に学ぶ。
- ・三回の全体会

全体 会 1	2014年5月20日(火)～22日(木) 東日本大震災の被災地での臨床実習(石 巻、東北大学大学院との合同研修)
-----------	--

全体 会 2	2014年6月25日(水)～26日(木) あそかビハーラクリニック・ビハーラ本願 寺での臨床実習(京都)
全体 会 3	2014年7月15日(火)～17日(木) 保育園・デイサービスセンター統合社会福 祉施設での臨床実習(宮崎)

・特別実習

特別実習 1	東日本大震災の被災地での臨床実習 (仙台・南三陸・気仙沼)
特別実習 2	広島平和祈念資料館訪問と被爆者講話 による臨床実習(広島)
特別実習 3	社会福祉施設、常清の里などでの臨床 実習(大阪など)

(4) アドバイザリーボードによる提言

学内外の有識者によるアドバイザリーボード(顧問委員会)を組成し、「臨床宗教師研修」を推進する。

ひとえに東北大学における取組みに深く感動してここまでたどり着いた。こうして龍谷大学大学院においても「臨床宗教師研修」を始めるにあたり、東北大学大学院文学研究科実践宗教学寄附講座の皆様には感謝の気持ちで一杯である。今後、それぞれの大学でその特色を生かして臨床宗教師研修が実施されることになる。これからの歩みをどうか見守っていただきたい。最後に、折に触れて思い出すことがある。2011年5月7日、東北大学で「心の相談室」設立シンポジウムが開催された時のことである。岡部健医師が私にも声をかけてくださった。「死という心の暗闇におりていく人に心の依りどころを指し示すような宗教者が必要であると思っています」と。それは、緩和ケアにおける“Do not curse the darkness. But light a candle.”「暗闇を罵るのではなくて、一本のろうそくをともしよう」という言葉と思ひ重なる。解決のつかない悲しみに沈んでいる人に宗教者が向き合い、そこに共にいることが、きっと希望のあかりとなるにちがいない。



大切にしたいことは何ですか



爽秋会岡部医院医師 河原正典

墓参り

臨床宗教師は、今回の震災をきっかけとしてつくられましたが、もともとは岡部健医師と在宅緩和ケアと一緒にいるときから、「宗教者がもっと活躍をすればいいのに」と話し合っていたのが始まりです。私の患者さんにも時々いらっしゃるのですが、がんと告知され、これ以上の治療もなく、自宅で最期をすごしたいと病院から退院してきた患者さんに「何か、やりたいことはありますか?」と尋ねると、「墓参りに行きたい」という方がいらっしゃいます。時には、「今日は出かけてきて疲れたんだ」と言うので、どこに行かれたのかうかがうと、「墓参りに行ってきた。これから、行く場所だから挨拶をしとかなきゃな。」と言った方もいました。こんな経験をしてきましたので、もし、こうした患者さんが、菩提寺の僧侶と以前から葬儀等以外でも繋がりがあり、墓参りの折に少しでもお寺の住職などと話しができれば、本人にとって、墓参り以上に心が落ち着く一助になるのではと思います。

在宅での居場所

私は、在宅緩和医療を専門として、日々往診をしています。ある時にふと気がついたことがあります。それは、患者さんが療養している場所には、たいてい仏壇や個人の遺影があることです。もちろん、元々のおじいちゃんやおばちゃんの部屋に仏壇があるからということもあるのですが、家族はもっと長生きして欲しいと願っているにもかかわらず、患者さんは死を意識させうる仏壇や遺影の側ですごしています。このことに、私はすごく不思議な感じをおぼえるのです

が、家族や患者さんには何の矛盾もないのです。

先ほどの墓参りの話にもつながるのですが、何か自分が永眠した後の“繋がり”を感じさせるのかなと思っています。

震災と病

今回の臨床宗教師の育成は、震災の被災者・遺族の方々が対象であるはずで、何故、がん患者さんも対象とするのですか、と質問を受けることがあります。私からすると、震災もがんもどちらも、突然その人に襲いかかる大事件という点では、変わりはありません。

震災は、それでも周りを見れば、同じ境遇の方々がいるのに対して、がん患者さんは、がんと告知された時に、周囲に同じ気持ちを抱える方がいない点を考えると、その人の人生にとっては、津波以上の衝撃かもしれせん。将来、がん患者さんはこれからさらに増えていきます。そこに力を注がないで、大規模災害の被災者だけに問題や対象を限定してしまうのは、臨床宗教師の構想がもつ可能性を最初から狭めることになるのではないのでしょうか。

臨床宗教師という名前

最初に岡部医師と、チャプレンを日本に導入するとしたら、どのような名前が良いのかなと話し合ったことがあります。その時、私は何気なく臨床宗教家かなといった覚えがあります。私は、実践宗教学寄附講座などの立ち上げには関わっていないので、岡部医師が日本版チャプレンとして臨床宗教師と名付けたのか、それとも皆さんで話し合っって名付けたのかは経緯を知りませんが、宗教家ではなく宗教師としたのは何故なのかと思うときがあります。このことを考えるとき、当院の看護師が患者さんの言葉として、「病気だけを見るのはドクター、患者の気持ちまで考えてくれるのが医者、そして尊敬できる医者が医師だ。」と言っていたのを思い出します。師という漢字に、なにか特別な意味を込めたような気がしています。

そのことを思い出しながら、今、“臨床宗教師”の言葉を見るたびに、本当に「師」にたる存在になっているのだろうかと思います。厳しい言い方ですが、それに私にこんな事を言う資格はないのですが、現状のカリキュラムでは、本当の臨床宗教師にはなれないと思っています。臨床宗教師への一步を踏み出した程度ではないのでしょうか。

臨床宗教師の活躍の場所

今、臨床宗教師の活躍の場所として、被災者へのケアを別とすると癌末期の方へのケアを想定しています。私としては、もっと早い時期からの医療現場への介入ができれば、と思っています。私は医者なので、医療の現場で、こうなったらいいなと考えていることを書きたいと思います。

まず、がんと診断されたときに、たいていの患者さんと家族は頭のなかが真っ白になることが多いです。それゆえに告知をされた後、必ず、臨床宗教師の方との面談が設けられ、そこで何か心配事はないか、医者の話は分かったかなど話し合い、その後、必要な関係者に面談結果がフィードバックされたらよいのではないのでしょうか。がんの再発を告知された時や抗がん剤を中止した時は、患者さんやご家族の衝撃は一層深くなり、混乱も本当にひどいものとなります。このようなときにも臨床宗教師には面談をしながら、信頼関係を築きつつ、患者さんがホスピスに移った後も、繋がりを持って対応していただけたらと思います。

次に、交通事故や自死などでの救急搬送時に、家族への対応をしてもらえればと思います。医療者は、目の前の生きるか死ぬかの患者さんの対応に迫られ、家族への対応まで手が回らないことが多いのです。そのようなときに、家族の気持ちを聞いたり、患者さんのその時々状態を知らせしたりしていただければと思います。例えば、「CTを撮影しています」「手術の手配をしています」「もう少しで、医療者から説明があります」などです。

さらに、病院の看護師さんなどのスタッフの気持ちを聞いていただければと思います。スタッフの方々も、日々、患者さんと接する中で、ストレスを抱えています。私自身の話で恐縮ですが、私は、在宅緩和ケアに携わる前は、普通の病院で働いていました。もちろん、患者さんの終末期の医療にも携わっていましたが、岡部医院で働くようになってから、患者さんから、「先生のおかげで、よくなりました。」と言われることは当然なくなりました。病院で働いていた頃は、この一言で疲れがとれ、明日からも頑張ろうと思っていました。その一言がなくなり、今、自分を支えているのは、もちろん在宅緩和ケアが必要であるという使命感とスタッフの支えがあるからだと思います。臨床宗教師の方には、是非、患者さんや家族だけでなく、スタッフの方々とも話し合っていただければと思います。

私が臨床宗教師にお願いしたいこと

臨床宗教師がメディアに取り上げられて目にする機会があります。その記事の枕詞に臨床宗教師が「心のケア」とか「癒し」などがついているのが多いと思います。私は、実際の現場に立つ人間なので、もう少し具体的な事をお願いしたいと思います。それは、患者さんや家族の気持ちの交通整理とでもいうべきことです。先ほどの活躍を期待する場の話でも少し触れましたが、患者さんは闘病生活の中で様々な場面で混乱します。その時に少し力をかけてあげてください。私は、患者さんにご家族に対して、次のようなことを気にかけてながら往診しています。

- ①何が苦痛なのか
- ②何か心配事はないか
- ③何を大切にしたいか

①に関しては、がんによる痛みなどは勿論医療の範疇ですが、それ以外にも出かけられないことが苦痛だったり、料理が食べられないことが苦痛だったり、苦痛も様々です。

②自分の体がどうなっていくのか？ 痛みはひどくなっていくのか？などだけでなく、子供の今後が心配だったり、孫の大学入試が心配だったり心配事もまた様々です。

③この「何を大切にしたいか」は、本当に様々ですが、今まで大切にしてきたことはなんなのか、そして病となった今、なにを大切にしたいのか。

この3つを気にしています。そして、この3つに対応することが、緩和ケアの一步だと考えています。臨床宗教師の方にも、この3つを気にかけていただいて、関係者の方々と連携して、対応していただければと思います。この3つのことは、宗教とは何の関係もないのではと思われるかもしれませんが、これらのことを突き詰めて考えていくと、宗教や哲学にひどく近いものになるような気がしています。そして、これらのことは、癌終末期の時期だけでなく、人生の様々な場面で考えなくてはいけないことだと最近思っており、臨床宗教師の方が、病院だけでなく色々な場所で活躍できるのではと思っています。

東北大学にお願いしたいこと

書くまでもなく、実践宗教学寄附講座をこの3年で終わらせるのではなく、常設の講座にしていきたいと思います。医療者はある意味、宗教に対して非常に警戒心があります。患者さんががんと診断された後

に、いろいろな宗教から勧誘があったりするという話はよく聞きます。

私も経験がありますが、患者さんが癌と診断されてから、民間療法と祈祷が混じったような宗教にはまり、外来に来なくなって、その後もはやどうにもならない状態で病院に運ばれてきたことがあります。

これはもちろん極端なケースです。しかし、多くの医療者が大なり小なり似たような経験をしています。そうした中で、宗教者が病院などで医療者と一緒に仕事をする上では、東北大学で勉強をしてきたという事が、医療者側の警戒心を和らげることに繋がると思っています。さらには、いつかは宗教者でなくても、一般の方でもある一定の基準を満たせば、この臨床宗教師になれる道をつくっていただければと思います。例えば、哲学や宗教学を学んだ方々でも、この講座を受講でき、臨床宗教師になればと考えます。そして、真に宗教が必要な場合は、臨床宗教師のネットワークで必要な人に対応していただければと思います。

宗教界にお願いしたいこと

私が診ていた患者さんのおひとりに、仏教の本や仏像の写真集などが本棚にあり、往診したときに宗教の話などもする方がいました。その患者さんを看取り、しばらくしてその家にグリーフケアをかねて訪ねていったときに、位牌はなく、故人の写真とそばに仏像が置いてありました。家人に話を聞くと、家族葬で行うようにと生前からいわれ、故人が旅行先で気に入って買った仏像を位牌代わりにしているそうです。

最近私が関わっている患者さんでも、家族葬が増えていると感じています。別にそれはそれでかまわないのですが、伝統宗教は、今後の自分たちの役割をどのように考えているのでしょうか、葬儀ビジネスに特化していくのでしょうか。臨床宗教師は、今の伝統宗教にとっては、一つの道として重要だと思うのですが、もう少し力をかしていただけたらと思います。この様なことを書くと、臨床宗教師を新しいビジネスと捉え、講座を受講する方もいるかもしれませんが、私はそれでもよいと思います。

医学部の話で申し訳ないのですが、医学部を受験した動機を以前、同級生と話しをしたことがあります。単純に、女性にもてると思ったからと答えた人もいました。でも医学部で勉強し、患者さんに接するうちに成長したのでしょうか。今では、某病院で患者さんやスタッフからの信頼の厚い医師になっています。先ほどの東北大学にお願いしたいことにも繋がりますが、受

講することによって勉強し、成長するようなカリキュラムになればと思います。

終わりに

先ほど、一般の方でも、臨床宗教師になれると良いなと書いたばかりですが、宗教者が臨床宗教師に向いているなと思うことがあります。それは、心の重荷を下ろせる場があることです。終末期の患者さんと話しをしていると、重い話しになることがよくあります。そして皆さん、旅立っていきます。私は何の宗教も持っていないませんが、それでも、何かに祈り、心の重荷をおろし、自分の気持ちを落ち着けたいと思うことがあります。

この先、臨床宗教師がどのように発展していくのか、あるいは終わるのか分かりませんが、色々な場面で、必要とされたときには力をかしていただけたらと思います。

ケルスティン・ラマー博士講演会実施報告 第96回宗教学研究会

「ドイツの病院と緩和ケア施設における魂のケアとスピリチュアルケア」

日時：2014年4月22日16:20～18:20

場所：東北大学文学部棟3階311教室

主催：文科省科研費「喪失と悲嘆に対する宗教的ケアの有用性とその専門職育成についての研究」(25284015、代表者・谷山洋三)

中島平和財団国際学術研究助成「ドイツ語圏の医療福祉におけるゼールゾルゲの展開とその現在」

東北大学宗教学研究会

グリーフケア特別講演会

「死を理解するー死別における魂のケアー」

日時：2014年4月23日19:15～21:00

場所：仙台市シルバーセンター研修室1

主催：文科省科研費(上掲、25284015)

中島平和財団国際学術研究助成(上掲)

共催：仙台グリーフケア研究会

Prof. Dr. Kerstin Lammer ルター派牧師、家族療道家、スーパーバイザー。米国シカゴとホノルルにおいて病院付きゼールゾルガーとして働く。牧師として教会で働いた後、牧師研修所においてスーパーバイザー及び指導者として働く。2007年よりフライブルク福音主義単科大学において魂のケア、スーパービジョン、牧会心理学の教授。専門はグリーフ研究。主な著書に『死を理解する』、『悲しみを理解する』（邦訳『悲しみに寄り添う-死別と悲哀の心理学』）がある。

第二回臨床宗教師フォローアップ研修のご報告

主催:東北大学大学院文学研究科実践宗教学寄附講座

共催:大正大学宗教学会、上智大学グリーンケア研究所、龍谷大学大学院実践真宗学研究科、鶴見大学先制医療研究センター、臨床スピリチュアルケア協会、東京看取り人プロジェクト、臨床パストラルケア教育研究センター、臨床仏教研究所、愛知学院大学、いのち臨床仏教者の会、高野山大学、日本スピリチュアルケアワーカー協会

協力:日本スピリチュアルケア学会

3月4日(火)

第1部(一般参加可)

開会挨拶 鈴木岩弓(東北大学教授)

趣旨説明 谷山洋三(東北大学准教授)

公開講演会

窪寺俊之(聖学院大学教授)「宗教家と臨床宗教師」

活動報告ワークショップ

第2部(関係者のみ)

自己紹介ワークショップ

事例検討会(木下克俊氏、佐々木慈瞳氏)

総合コメント(大下大圓氏、小西達也氏、窪寺俊之氏)

3月5日(水)

第3部(※関係者のみ)

ワークショップ

大下大圓(飛騨千光寺住職)「死について語る」

ワークショップ

谷山洋三(東北大学准教授)「課題設定」

閉会挨拶 弓山達也(大正大学教授)

2014年3月4日、5日、大正大学巣鴨キャンパスにおいて、全国各地から約100名の参加者を集めて第二回臨床宗教師フォローアップ研修が行なわれました。

フォローアップ研修とは、臨床宗教師研修を受講した修了生を対象に、事例検討会やグループワークを通じて、ケアのスキル向上や情報交換、活動のネットワーク作りに役立てようとするものです。今回は実践宗教学寄附講座の主催で、上記の多くの団体が共催団体として加わり、人々の心のケアに関わる臨床宗教師が、志を同じくする人々と連携して、広いネットワークの中で活動を広げていくための一歩を進めました。

臨床宗教師、ビハラー僧、パストラルケアワーカー等々の仕事は、いったん現場に出ると孤独なものとなりがちです。これらの人々がお互いに情報交換を行ない、現場で起きていることを学びあい、協力しあうことで、自分の仕事のやりがいを確認し、ケアの質を高めていくことができます。ケアに従事する人々が受けてきた教育のシステムはさまざまであり、互いに異なっていますが、現場レベルではつながることができます。今回のような研修の機会を通じて、他職種、他宗教に属する人々との間で個人同士が出会い、同じ地方の中でネットワークを作ることにつながっていけば幸いです。(谷山准教授の趣旨説明より)。

第1部は一般公開で行なわれました。今回の企画の基調講演とも言うべき、窪寺俊之先生の講演「宗教家と臨床宗教師」から印象に残った部分を紹介します。

傾聴は「心を傾けて相手の感情や心の動きを聴きとること」であり、徹底的に相手主体のケアです。魂へのケアは、如何なる形でも宗教や入信を押し付けません。本人の宗教心を尊重するために、本人に寄り添い傾聴します。悲しみや怒りを受け止め、崩れそうな時には支え、泣き出す時には一緒に泣き、一緒に立ち上がることを待ちます。

しかし、それだけででしょうか。宗教家が傾聴という時、もう一つ別の意味があるように考えます。単に被災者の嘆きや悲しみに共感するだけではなしに、そこに注がれている神仏の声も聴くのです。被災者の声が第1の声で、私の声が第2の声だとすれば、もう一つの第3の声です。肉眼には見えませんが、魂が聴き取る声です。それは超越者の祈りと言えるかもしれません。神仏の声です。その声は被災者と臨床宗教師の中に居て互いの理解を助け、「被災者の物語」(ナラティブ)を引き出してく



窪寺俊之先生

ださいます。臨床宗教師も神仏と一緒に居て助けてくださるから、被災者の物語を聴くことができるのです。臨床宗教師が聴く声は神仏と一緒に居るといふ声と慰めの声です。

窪寺先生は牧師、チャプレンとしてのご経歴を持ち、日本のスピリチュアルケアの中心を担ってこられた方ですが、この部分では、宗教者にしかできない心のケアとは何かという臨床宗教師プロジェクトの問いかけに応じる形で強いメッセージを下されました。

臨床宗教師は、亡くなった人々の意志と願いを聴くことで、その方々と一緒に「新しい物語」を創造することができるということが述べられ、東日本大震災を経験した宗教者は「どんな物語」を生み出したかを10年後、30年後に、50年後に問われることになるだろうという言葉で講演はしめくられました。

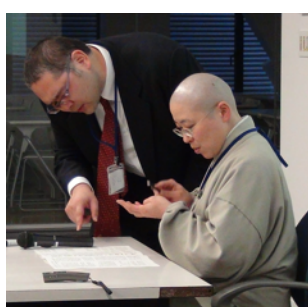
続く活動報告ワークショップでは、参加者全員が地方ごとに数人のグループに分かれて、日頃どのような活動を行なっているか、情報交換を行ない、代表者が会場に向けて報告を行ないました。

第二部からは、ケア従事者向けの専門的な内容になることと、事例報告に個人情報が含まれることへの配慮のため、非公開で行なわれました。

最初の自己紹介ワークショップでは、文字通りの自己紹介を会場にいる者同士でランダムに行ないました。これによって個人と個人が会う場が作られ、会場の空気が暖まりました。



事例検討会では、木下克俊氏（臨床宗教師研修第4期生）、佐々木慈瞳氏（同2期生、日本スピリチュアルケアワーカー協会認定臨床宗教師）が、それぞれ医



報告を行なう木下克俊氏（左）、佐々木慈瞳氏（右）

療施設での患者およびその家族と交わした会話記録を提示し、報告を行ないました。

質疑応答の中で、仏教的な考え方など、宗教者としての特質を前面に出すことが、相手のニーズに寄り添うことを妨げるのではないかといった、臨床宗教師によるケアのあり方についての重要な議論が行なわれました。

全体へのコメントとして、窪寺俊之先生は、二つの事例報告はまずまず合格であるという評価とともに、問題点を指摘されました。それは、事例そのものはすでに過去のものであり、それがどうすればうまくいったのかというテクニカルなことを議論するためにこの場があるのではない、というご指摘でした。この場でしか経験できないことは何なのか、自分を吐き出し、自分を捨てて、事例を材料として自分を変えることが必要なのではないか。事例検討会とは、臨床宗教師として自分が何をしなければならないのか、自分は何のためにそこにいたのか、という自分の問題をしっかりと聴く場、実存的な場、本当の出会いの場となるべきである。おおよそ以上のような耳の痛いコメントをあえてくださった窪寺先生の教育のご配慮に感謝します。



小西達也先生（武蔵野大学） 弓山達也先生（大正大学）

二日目のプログラムの最初は、大下大圓先生（飛騨千光寺住職）によるワークショップ「死について語る」が行なわれました。大下氏は、スピリチュアリティを科学と宗教の中間領域に位置づけ、医療者による科学に基づいたスピリチュアルケア、宗教者による宗教性



大下大圓先生

を背景とするスピリチュアルケア、この両者が互いに学びあい、歩み寄る必要性を語りました。その上で、大下氏は「臨床宗教師の資質」とは「死生観を語りあえる力」であるとして、「臨床宗教師の〇〇さん、私、死ぬのが怖いです。どうしたらいいのですか。」という相談にどのよう

に應えるかを考える二人一組のペアによるロールプレイ、「わたしの命はどうなるの?」という問いをめぐる六人一組のグループワークを全員で行ないました。

谷山洋三准教授による「課題設定」のワークショップは、研修によって得たものや感想をシェアし、今後の活動に向けての自分の課題とは何なのかを語り合うもので、宗教者としてスピリチュアルケアを行なう心構えについて確認しあうものでした。

最後に、大正大学の弓山達也教授から四つの提言がなされました。(1)臨床宗教師の役割は非常時ではなく平時にあるのではないか。(2)臨床宗教師は若者にこそ求められているのではないか。(3)臨床宗教師が所属している教団等の組織や施設の持つ力も見直すべきではないか。(4)宗教の持つ伝統の力をもっと評価すべきではないか。このように述べた上で、宗教者と宗教学者が協力して進めている臨床宗教師という希有なムーヴメントへの期待感が表明されました。会場を提供してくださった大正大学、さまざまな雑事に労を執ってくださった弓山先生、大正大学宗教学会の皆様にあらためて感謝を申し上げます。(高橋原)



参加者の感想

フォローアップ研修への参加者よりいただいた感想のいくつかを紹介します。(紙幅の都合もあり、適宜編集させていただきました)。

さまざまなバックグラウンドをお持ちの参加者と、かなり重たいテーマも含めて、ご一緒にお話しできたことは良い経験になりました。それぞれが傾聴のご経験があるからでしょうか、どのグループでも思っていることを素直に口にすることができて、心の中の荷物が少し軽くなった気がしたと同時に、私個人の問題点や課題に向き合えた、またとない機会になりました。窪寺先生の厳しく、かつ冷静なコメントをお聞きして、自分自身が学生対象のワークショップを流れ作業の

ように行っていることに気づきました。日常に呑み込まれて、本来の目的や高い志を見失うことの怖さに気づいた貴重な体験でした。

全国的な動きとして盛り上がっている様子が、宗教界に身を置く立場として嬉しく思われた。臨床宗教師の数を増やすという意味では成功したのだと思う。しかし、受講者のレベルには差が大きく、現場に送り込んで大丈夫なのだろうか、難しい現場であるだけに少し不安に思う部分もあった。

今回受講してようやく分かってきたことは、自分の悟りはともかくとして、現実苦しんでいる人がいる。その人達の心に寄り添い、向き合っていく。それをアカデミックに対応し掘り下げていくのが臨床宗教師であると。今日の日本を考える時、こうした課題に社会全体が向き合う時期に来ているかと思う。

多くの方々と交流を深めることが出来て、大変満足しました。宗教・宗派が違って、そこに大きな壁はなく皆様大きな温かいお心で迎えて下さり、改めて皆様素晴らしい方々だと思いました。それに比べ、私はまだまだ皆様のような素晴らしい心を持っていないと思っています。研修中はいつもビクビクしながら臨んでいました。皆様のように明確な言葉が浮かばず、有意義な時間を無駄にしまい、皆様との距離が広がっていると感じていました。しかし自分をありのままにさらけ出す事によって、私の魂が出てきて、宗教者・臨床宗教師として大きく成長できるのではないかと感じました。

思いがけない程の大きな集まりで驚きました。東北大学の活動が確かな形になっていること、先生方のエネルギーにただただ感激します。その輪の末席に加えてもらっていることが嬉しく、一方で自分の動けなさ、力のなさが情けなく複雑な思いで研修を過ごしました。やはり、私の課題は“宗教者”としての自覚と覚悟だと思います。外に出て今回のように自分の活動をしている間、寺では留守を信者さんたちが補っていて、実はそんな部分でも、私自身、足元の役割、働きをおろそかにしているのではないかと迷いもあります。それでも進みはじめた船を見送るよりも、航海をともにしたいという気持ちになりました。

研修に参加してまず思った事は、それぞれの現場で活躍し、修練を積みながら歩んでおられる志を同じくする方々と出会い学び合う事が、どれ程貴重で、自分の深まりと励みにつながるものであるのか、改めて確認させられた事でした。その場所の空気、人の表情、言葉、全てから自分の今の現状を浮き彫りにさせられ、課題を痛感させられる事となりました。そ

して、その課題をどう克服していくのか、そのヒントも頂きました。本当に充実した時間を頂き、感謝しています。

今回の研修で、多くのスピリチュアルケア・宗教的ケアの実践を志す方や研究者の方が一堂に会し、活動がより広がりをみせ、臨床宗教師会が発足した事は大変嬉しく、それぞれの臨床宗教師養成講座修了者の仲間や志を同じくする方々が各地域で根を張る活動をされておられますが、その活動の点が線となり、後に面となって日本の社会全体に臨床宗教師が居る事があたりまえになる様、広がる事を願って活動を続けて行きたいと思っております。

私は今回、あえて、宗教者としての特性を活かした関わりについて、より具体的な方法論や技術論を考え学ぶことをテーマにして研修に臨んだ。それは、現在、病院内での活動下においては宗教者としての私が前面に出ることなく被支援者との関わりを深めている中で、その状況が常態化してしまえば、宗教的な関わりや、臨床宗教師における宗教的ケアの実践へのハードルがますます高くなるような危惧を感じているからである。現実的には、宗教的な関わりや宗教的ケアを実践する状況はあまり無いが、それでも、それらが求められる時が来た時のために研鑽を積んでおく必要がある。成果として、（１）被支援者に対してアプローチする際に、被支援者が抱く、言葉に置き換えようの無い悲嘆や、感情の状態を、言葉にして差し上げるための言葉力が重要であり、それを養うのには、自身の信仰によって、自身の心の奥に問い合わせる信心が強化されるべきであること。しかしこれは被支援者へ誘導的であってはならないし、植え付けてもならない。共にもがきながら言葉を生む感覚が必要。（２）臨床宗教師とは、どのような存在なのか、頭で考えるのではなく、心で感じるものであり、定義付けに縛られてはならない。

フォローアップ研修では、過酷な現実の中で苦しむ方々をどのように理解し、どのように寄り添うべきか、という方法論に焦点があてられていたように感じました。「自分は宗教者として何をすべきか」ということには参加者の皆様が強い関心をお持ちだと感じましたが、なぜ、自分は宗教者として生きることを選択したのか、なぜ、苦しむ人に寄り添いたいと思うようになったのか、という宗教者自身の問題に向かい合うことの大切さも、透けて見えてきたように感じました。他者に寄り添う、ということは、自分の全人格を賭してそこに在る、ということだと私は考えています。他者に向ける以上のエネルギーを自分自身に向けて常に自分に問いかけながら、他者に向き合っていきたいと思いました。

研修会終了後の自分の活動について、振り返る良い機会となりました。実習の流れに沿ってカフェデモンクへ参加させて頂いたり、また電話相談にも参加させて頂いたりして頂いましたが、これらは既存の、ある意味では与えられた現場であったと思います。もちろんこれらが大切な現場であるということは間違いありませんが、もっと自分に近いところで「臨床宗教師」としての活動の現場を求めて行くことも大

切ではないかという思いになりました。もっともっと身近なところに「臨床宗教師」としてのニーズがあったのではないかと思います。自ら「臨床宗教師」としての営業活動を行ったり、また実際に「臨床宗教師」として就職した方もいたり、そう言った活躍されている方のお話を聞けたことが自分の励みとなりました。また、この「臨床宗教師」という立場を、こんなにもたくさんの人たちや団体が応援しているということを知ることができました。その裏側には「臨床宗教師」が社会から求められているということを皆さんが感じ取っておられるという事があり、そして私たち宗教者にとって「いま社会に出て行かなければ将来はない」という危機感を、みなさんが感じられているのではないかと感じました。

事例検討会では、他の方々と同じように「どこで宗教性を出していいのかと判断をしたのか」という疑問を抱いたことは確かですが、質疑応答が、報告者を断罪するような空気に感じられ、残念でした。

事例報告では、厳しい医療現場の中で、医療スタッフとの信頼関係を持ちながら、臨床宗教師として、その時出会った患者さんと真摯に向き合い、その方の人生の最後の時を、この患者さんの求めているものを、考えぬいた上で心を込めて共にいられた姿だったことが伝わってきた。文字からではわからない、その背景だからこそ、この二人の関係性の中から生まれた会話記録だと思った。自己防衛だという意見があったが、私には、一つ一つの問いかけに、ていねいに答えられた姿だと感じた。事例検討にのぞむありようも考えさせられた。様々なことが学びとはなるが、事例提出者が自分のケースを出すことへのねざらんと感謝は参加させてもらう側の者の当然の態度だと思う。出していただいたからこそ共に学べるのだから。まず尊重し合うそのありようの上に、安全安心の場があり、自由で真摯な学びが展開すると思う。特に宗教者は、どんな場面でもそのように人と出会っていくことが大切だと私は感じた。

窪寺先生のご講演の、「第三の声」のお話はとても心に響いた。カウンセリングの場であれ、人と触れ合い話を聴かせていただく場であれ、私は祈りや願いが底辺にあり、その上で出会わせていただくことを大事にしている。そして目の前の人の言葉の奥の気持ちに、言葉にはなって出てこないその方の気持ちに寄り添おうと、努力しているつもりでいたが、「第三の声」、神仏の声を聴かせていただくとする自分だったかと、改めて自分を振り返った。神仏の加護のもとに出会わせていただいている私と目の前の方だとは思っているが、更に神仏の声を聴ける私になっていこうと、一つ光をいただいた。

他の団体の方たちと出会えたのもよかった。ただクロードの時間にその方たちが入られたのは、私には違和感があった。4期の人にとって初めてのフォローアップであるなら、やはりそこは本当の意味で同じ学びをした人たちでまずは丁寧に学びたかった。

第4回臨床宗教師研修報告

研修データ

期間：2013.10.15-17, 11.12-13, 12.10-11

場所：石巻市曹洞宗統禅寺、仙台市浄土宗蓮光寺、東北大学、他

修了者：19名(うち女性3名)

宗派内訳：曹洞宗(2)、真宗大谷派(2)、浄土真宗本願寺派(2)、浄土宗、日蓮宗、天台宗、高野山真言宗(2)、臨済宗建仁寺派、孝道山本仏殿、日本基督教団、救世軍、在日大韓基督教会、金光教、立正佼成会、神社本庁

地域：山形、宮城、福井、東京、千葉、神奈川、静岡、岐阜、奈良、京都、大阪、山口、大分、鹿児島

年齢：23才～68才(平均45才)

第4回臨床宗教師研修は、二泊三日1回、一泊二日2回の合宿(全体会)と、その合間の期間に各地に分散して実習を行なうという形式で行なわれた。各地の医療・福祉施設での傾聴実習の受け入れ先として次の各施設が加わった。

(1)光ヶ丘スペルマン病院：カトリック仙台教区が母体となって設立された一般財団法人光ヶ丘愛世会が運営する院内独立型のホスピス。棟内に小聖堂と祈りの間があり、毎月一回ミサがある(参加自由)。パストラルケアワーカー1名が常駐し、パストラルケアボランティアも関わる。仙台市宮城野区。

(2)佼成病院ビハール病棟：立正佼成会附属病院が運営する緩和ケア病棟。病棟内に御宝前があり、スピリチュアルケアワーカー(心の相談員)がボランティアとして活動する。東京都中野区。

(3)沼口医院：医療法人徳養会が運営するクリニックと、訪問看護ステーション・アミターユスにより、在宅緩和ケアを行う。岐阜県大垣市。

これら以外の実習先は前回と同じく、岡部医院、Café de Monk(カフェ・デ・モンク)、仙台食品放射能計測所、電話相談、ビハール21関連施設群、長岡西病院ビハール病

棟であった。

今回も全国から受講者が集まり、女性は3名であった。キリスト教系の受講者が3名というのは過去最多であり、また神社本庁の神職の受講者も初めてであった。全体の受講者数が19名というのも過去最多であり、これにともない、打本弘祐氏(社会福祉法人慶徳会常清の里心の相談員)をグループワークのトレーナーとして新たに迎えた。

座学(講義)、グループワーク、実習(含・追悼巡礼、日常儀礼)という全体の構成と、別表に示す講義科目はほぼ従来通りである。新しいこととしては、「人権擁護」の講義を、曹洞宗長秀院(福島市)の渡邊祥文住職にお願いし、福島県の実情を踏まえて原発事故を人権の問題として論じていただいた。また、「公共性の確保」の講義では、立正佼成会学林の相ノ谷修通先生に、公益法人制度の観点から、宗教者の公益性について論じていただいた。



相ノ谷修通先生



渡邊祥文先生

10月15日、研修の全体会は、石巻市の曹洞宗法山寺を会場として始まり、北村暁秀師の先達で、津波で多数の方々が亡くなった同市内湊地区を回る追悼巡礼を行なった。恵愛病院跡地前、湊二小体育館跡地前、渡波海岸で足を止めて各宗教・宗派のやり方で追悼の祈りを捧げた。

研修二日目は台風26号の影響で猛烈な風雨に見舞われ、波立つ田んぼから道路に水が溢れ出すほどであった。この日は昼からカフェデモンクでの傾聴実習が予定されており、開催が危ぶまれたが、幸い雨も上がり、仮設住宅の皆さんが多数訪れてくださった。カフェには東北大学文学部の学生も見

表：第4回臨床宗教師研修講義科目一覧

担当講師	題目	担当講師	題目	担当講師	題目
伊藤文雄	「臨床宗教師の理念」	谷山洋三	「会話記録の作成法」	吉田裕昭・高橋悦堂	「地域と文化」
小西達也・谷山洋三	「臨床宗教師の倫理」	相ノ谷 修通	「公共性の確保」	渡邊祥文	「人権擁護」
谷山洋三	「スピリチュアルケア」	河原正典	「在宅緩和ケア」	木村敏明	「宗教間対話」
谷山洋三	「グリーフケア」	黒川雅代子	「あいまいな喪失」	高橋 原	「実践宗教学」
金田諦應	「カフェデモンク」	鈴木岩弓	「民間信仰論」	甘糟 郁	「精神保健と医療」
川上直哉	「放射能の影響」	谷山洋三	「宗教的ケア」		

学を訪れた。研修三日目には講義とともにロールプレイが行なわれ、各自が個別に行なう実習に備え、最初の全体会は終了した。

11月12日、全体会の二回目は仙台市の浄土宗蓮光寺に会場を移して行なわれた。講義とともに、各受講生が個別に行なってきた実習の振り返りと、実習先でケア対象者と交わした会話に基づく「会話記録」のグループワークが中心となった。また名取市閑上地区で追悼巡礼を行ない、冬が近いことを感じさせる冷たい風の中、あんどん松付近、東禅寺、日和山湊神社で追悼の祈りを捧げた。

再び各地での実習を経て、12月10日、食品放射能測定所のりが置かれている仙台北教会から、最後の全体会が始まった。この教会は明治時代に起源を持つ由緒ある教会であるが、朝の日常儀礼の際に 備え付けられているパイプオルガンを演奏していただく幸運に恵まれた。



蓮光寺に移動してグループワークと講義を行ない、夜には懇親会が開かれた。翌11日の午後に東北大学文学部に移動して講義とグループワークを行なった後、研修全体のフィナーレとなる修了式が執り行われ、森本浩一文学研究科副研究科長より、研修を終了した受講生19名に対して修了証書が手渡された。森本先生は、臨床宗教師のプロジェ

クトに対して、「宗教」という名前は、まだまだ社会的に抵抗感を呼び起こすものであるとしながらも、東北大学文学研究科としても重要な社会貢献として評価していると所感を述べられ、ご自身の体験も交えながら、臨床宗教師が苦しんでいる人々の話を聴き、支えになることへの期待を述べられた。

さて、今回の研修においても毎日朝夕に「日常儀礼」が行なわれ、それぞれの宗教宗派の日常的な儀礼や祈りを体験する機会がもうけられた。閑上の日和山湊神社を訪れるに先立ち、神道の拝礼の作法を一同で学んだが、これはこれまでの研修にはなかったものであった。また、救世軍歌を聴かせていただいたことも新鮮であった。仏教の座禅や五体投地も全員で行なった。これらは身体的所作を通じて他宗教を感じる経験となったと思われるが、仙台北教会での礼拝で読まれた一節「わたしは、だれに対しても自由な者ですが、すべての人の奴隷になりました。できるだけ多くの人を得るためです。」（コリントの信徒への手紙）は、臨床宗教師のあり方を考えるのに非常に示唆的な言葉であった。それぞれに工夫をして宗教的生活の一端を教えてくださいました受講者の方々に感謝したい。

最後に特筆すべきこととして、今回は第2回全体会と第3回全体会の後に、医療機関の関係者との交流学習会の場を設けた。ミニレクチャーとグループワークを行ない、医療に携わる人々に、現場で宗教者が果たし得る役割について考えていただくとともに、今後医療や福祉の世界に活動の場を求めていく臨床宗教師の皆さんに、現場の人々の声をじかに届ける機会となった。引き続き今後もこのような機会をもうけていきたい。



2013年10月16日、カフェ・デ・モンクでの傾聴実習を終えて

研修受講者の声

第4回臨床宗教師研修の最後にお願
いした1分スピーチの内容を、研修
中の写真とともに掲載します。



中森千恵（高野山真言宗）

研修に参加して、ロールプレイや
会話記録で自らの課題を発見させて
いただき、受け入れられた事はとて
も大きな収穫でした。そして石巻、
大阪での貴重な傾聴実習を通して、
自己の自信、向上に繋がる事がで
き、今まで自分が行ってきた事やこ
れからの理想への試金石となりました。
また、こうやって多くの皆様と
共有し、仲間づくりが出来た事も本
当に有り難く嬉しい限りです。医
療、福祉の現場にありますが、この
研修での学びを生かし臨床宗教師と
誇れるようにこれからも自己研鑽の
日々を送りたいと思います。いただ
いた多くのご縁に感謝です。



南雲のどか（立正佼成会）

佼成カウンセリング研究所から来
ました、南雲です。立正佼成会にあ
るカウンセリング研究所というとこ

ろでカウンセラー養成講座の担当な
どをしておりますが、いつも仏教と
カウンセリングというものを自分の
中でテーマとしてきておりました。
こういう臨床宗教師研修というところ
で、その辺がこういうふうにつな
がっていくという側面があるんだな
あということを自分で実際に体験す
ることができたことは大きかったで
すし、また実践の場というところで
緩和医療病棟の場面で命に向き合う
ということを見させていただいたと
きに、本当に大きな役割があると体
験させていただいたことが、本当に
大きかったと思います。期間を同じ
くして自分自身の身内が命と向き合
うということを実体験して、さらに
自分の今回の学びを深めさせていた
だいたと、心から思っております。
やはりそれからこうやって皆さんと
出会い、ネットワークを作れたとい
うことが何よりも大きいと思いま
す。きっとこれからさらに下からじ
わじわとみんなと手をつなげて学び
を深めていくことで、今の世の中に
大切な一歩を踏み出していけるんじ
ゃないかと実感して、わくわくして
います。ありがとうございました。



木下克俊（天台宗）

福井県から来ました木下克俊で
す。今年の4月から在宅医療専門のク
リニックで事務スタッフとして働き
はじめました。半年くらい過ぎまし
て、どういう立ち位置で医療機関で
仕事をすればいいのかということ
をすごく考えていたんですけれど、
今回の研修を受けることで、スピリ
チュアルケアというものと、宗教的

ケアというものを自分の中で明確に
理解することができました。今後は
医療機関であるクリニックの中で臨
床宗教師としてしっかりと宣言して
実践をしていきたいと覚悟していま
す。ありがとうございました。



宮崎史人（浄土真宗本願寺派）

龍谷大学実践真宗学専攻科から参
りました宮崎史人と申します。今回
この研修では、失敗する機会とい
うのを与えてもらったことが自分の財
産だなあと思っております。本当に机の
上の勉強で知ったつもりだったんで
すけれども、実習先に行って、打ち
のめされるというか、こんなつもり
じゃなかったただけでもなあ、とい
う経験があって、本当にこれから先
の、自分の糧になっていくだろうな
と思っています。ありがとうございました。
皆さんと過ごせてよかった
と思っています。



小林義功（高野山真言宗）

海老名からきました小林でございます。今回この臨床宗教師という講座を受けさせていただきまして、今まではやっぱり私が僧侶ということと、私の御縁の人とのかかわりばかりで来ておりましたので、人が私に対してどういうふうに言っているのかということが、一つ、わからなかったのです。それが、ここで、「ああ、こういう見方をしてくれているのだ」ということが非常にわかりました。それが一つ、最大の収穫です。

それとやっぱりロールプレイ。最初はなんかわからなかったんですけども、やっているうちに「なるほどなあ」と。いろんな人たちの意見があって、自分では思いつかないような意見を聞いたっていうことは、これは非常に自分にとって宝物になったと思います。これからこれを糧にして自分の地域、その他でもってより活躍してゆきたい、年ではありますけれども（笑）、しかしまだまだ気持ちの方は、遅れをとってないつもりですので、がんばっていききたいと思います。ありがとうございました。



西池深音（浄土真宗本願寺派）

龍谷大学実践真宗学研究科、浄土真宗本願寺派から参りました西池深音です。今回の研修を通しまして、人の持つ感情というものには本当にさまざまなものがあるんだということに一番気づかされたかなと思います。自分が思ったこと、感じたこと、それがすべてではなく、それぞれの方がそれぞれの感じ方をされて

いて、そのもとになっているのが、やはり宗教の違いであったりするのかもしれないです。

でもこうやっていろいろとお話させてもらう中で、分かろうとする姿勢というか、やっぱりどうしてもわからないところも出てきました。それも見つかったというところもありましたけれども、本当に分かろうとすることができたかなと思います。あと、やっぱり自分が宗教者として、悩む人、苦しんでいる人に何かしたいという思いがあったんですけども、それをするには自分の支えとなっている「教え」というものが大切なものなんだということに気づかされた、それを本当に改めて問い直す機会というのもあったかなというふうな思いもあります。ありがとうございました。



森田恭一郎（日本基督教団）

今回の研修を通して、公共空間での寄り添うということを学ばせて戴きました。もとより「寄り添うこと」はなかなか難しいことですが、こちらの思いが期待されない公共空間でこそ「寄り添うこと」を問われ、かつ体験させて戴ける良い場所であると思われました。また併せて、臨床心理士とは異なる使命が臨床宗教師にあることを再確認できたことは有益でした。

今回、自信を与えてくれたのは、臨床宗教師としての働きの必要性を確認できたことに加えて、これを必要と思っている方たちに出会うことが出来たことです。岡部先生の問題意識との出会いのみならず、この研修を整えて下さった講師の先生方、

研修に参加した研修生の方たち、実習先で出会った医院のスタッフの皆様や患者さんやご家族の方たちとの出会い。このことがきっと今後の物事を考える上での大きな私の自信になりました。また、実習先では、この臨床宗教師の働きは、医療チームの支えと執り成しのある中で活かされるのだと改めて思いました。有り難く思いました。

この度、他宗教の多くの方たちが「公共空間における寄り添うこと」を前向きに考えておられること、日本における意義深いチャレンジだと思われました。今後、教会の営みとしてこれを位置付けられるかどうか、私にとっても大きな課題ですが、少なくとも、これらの公共空間での臨床宗教師としての課題は、教会という私的空間での「寄り添うこと」をも研ぎ澄まさせてくれるものです。今後とも皆様のそれぞれの状況の中で思い深める、寄り添おうとする皆様の志を分かち合わせて戴ければ幸いです。私も勇気付けられます。

皆さんとお目にかかれたこと、また、ご指導いただいたことを本当に感謝しています。ありがとうございました。



氏家栄宏（曹洞宗）

宮城県の曹洞宗の氏家と申します。何から話そうかまだまとまっていけないのが事実なんですけれども、皆さん本当に臨床宗教師というのを意識して研修にのぞんでおられることがすごいなあって私自身は尊敬しています。私はそれ以前の段階だったかもしれないなあというところもありまして、今回の研修で自分を、

宗教者として、人として、見つめ直すことができたというのが一番かなあと自分で思っています。

あとは皆さんの、さまざまな宗教的背景の方々と接することができて、すごく刺激を受けました。それも私にとっては貴重な体験になったかなあと思っております。臨床宗教師の研修は今日で修了なんですけれども、まだまだ本当に学ばなくてはならないこともあると思いますし、むしろスタートラインなんだと思う気持ちの方が強いので、本当にこれからが大事なんだなあと改めて感じています。本当にありがとうございました。



吉田裕喜（曹洞宗）

宮城県の石巻市から参りました曹洞宗の吉田裕喜と申します。今回の研修は他宗教、他宗派の方とふれあうことで、自分の固定概念や自分の価値観を壊していただいたかなあと考えたので、とても自分の中では大きな刺激になりました。それはもちろん他宗教、他宗派というだけではなくて、人と人とのコミュニケーションの中でも、自分を客観的に見ていただいて自分というものを良い意味で壊していただいたかなと思いました。それこそこんなに真剣に人の気持ちを見つめ合うというロールプレイングや、会話記録の振り返りなどもなかなか出来ることではないので、本当に貴重な経験をさせていただいたと思っております。今後の私の宗教者としての活動としての大きな一歩となると思うので、皆さん、本当にありがとうございました。



清水正彦（救世軍）

奈良県・生駒から参りました清水と申します。所属は救世軍というキリスト教会です。メンバーが皆宗教者ということもあり、グループワークでは、やさしく包み込んでもらえるような体験ができました。ケアする人、ケアされる人というのはこういう体験をするんだなということを、この全体での研修を通して体験させていただいたというのは私にとってありがたいことでありました。



谷 慈義（浄土宗）

東京から参りました谷でございます。60歳以上が3人おまして「老人クラブ」（笑）ですが、皆様のおかげで修了することができて、本当にありがとうございました。一回目の実習では、何をすればよろしいのか、何を会話記録に書けばよろしいのか、全然分かりませんで、谷山先生からいろいろご指導いただきまして、一回目は針の筵だったんですが（笑）、今日は天国のような気分です。一回目は傾聴ボランティアみたいな形の様子だったと思いますが、今日は臨床宗教師初級の入口みたいなところまでは行けたのかなと

思っています。これからも勉強してゆきたいと思います。ありがとうございました。



鴛海奉守（真宗大谷派）

大分からやってきました、鴛海奉守と申します。今回研修に参加するにあたって、生育歴を皆さんも書いたと思うんですけども、僕は何度も泣きながら書きました。いろんな人にいろんな思いで育てていただいたっていうのもあったし、ちょうど宮崎さん位の若さで私の父も癌の末期で、その痛みに耐えられず、病室から抜け出して自分で命を絶ったというのがありますので、今後こういった活動をするにあたって、病室を抜け出すその人と一緒にいられるような、そういう存在になっていきたいかなあと思っております。ありがとうございました。



梶野統胤（臨済宗建仁寺派）

山口県から参りました天台宗の梶野です。このたびは何も知らない状態でこちらに参って、研修と実習、すべて貴重な体験だったわけなんですけれども、実習では医療の現場に行かせていただいて、ただでさえ初めてのところなのに、そこに宗教者として関わらせていただくという、とて

も貴重でありがたい体験をさせていただいたと思っております。

皆さんとお会いできて、他宗派、他宗教の方とお話できるということでも、地元にはたらくおそらくなかったことであろうと思っておりますので、一歩踏み出してみてもよかったなと自分では思っております。どうもありがとうございました。



鶴澤貫陽（日蓮宗）

千葉県から来ました鶴澤貫陽と申します。今回のこの短い期間ではございましたが、体験、体感ということで、目まぐるしく、そしてとても貴重な時間を過ごさせていただきました。普段「…してあげてるんだ」と自分で思っていることが、実は「させてもらっている」ということを、とても感じたこの3か月でございました。とくに病院に行き、ケアを「してあげに行こう」と思っておりましたが、そうではなく、実は私の勉強を「させてもらいに行っていた」んだと、そう気が付くこともできました。やはりこの3か月という短い期間でございましたが、私にとっては何年も修行してきた中の、もっとも大事な事を教えていただいたのかなと思っております。

そしてここにいらっしゃる皆様とのおつきあい、他宗派、他宗教の方でもかまいません、私の拙い筆ではございますが、ぜひ来てくれと言えは演奏させていただくように……鹿児島ですと……ちょっと遠いものですから（笑）少々頂かなければいけ

ないかと思いますが（笑）。出来る限り、この結びつきでございませう、皆様のところにも私も行かさせていただくという気持ちでまたつながりを持てれば幸いです。誠にありがとうございました。



金田伊代（神社神道）

私はこの研修で色々なことを学び、感じ、考えたり悩んだりしましたが、「宗教者としてぶれない軸を持ちつつ、相手に寄り添えるようになる」という、自分の生き方としても、宗教者としても目標とするような課題を見つけることができました。また、普段の生活ではなかなかお話しできないような様々な宗教の方と交流を持てたこと、同じ目的をもった仲間に出会えたことは貴重な経験になりました。今回本当に参加させてもらえて良かったです。ありがとうございました。



奥原幹雄（金光教）

宮城県気仙沼市にあります金光教気仙沼教会の奥原でございます。皆様本当にありがとうございました。被災地にある教会ということで、震災直後から現地でボランティア活動させて頂いております。はじめは泥

カキから始まり、支援物資の配布や、炊き出し、お茶っこ、歌やゲームなど様々な活動をさせて頂いて来ました。しかし、一方で宗教者として本当にこのような活動でいいのであろうか。宗教者が被災者に寄り添うということは、どういうことなのだろうか。ということを求めながらの活動でありました。

そんな中で「臨床宗教師」との出会いを頂き、そして多くのことを学ばせて頂きながら、「寄り添う」ということは、いろんな立場の人たちがそれぞれの方法で被災者に寄り添っていかねばならないと感じるようになりました。そして私たち宗教者としての寄り添い方は、やはり「臨床宗教師」というスタンスが、一つの答えなのではないかと感じました。

カフェ・デ・モンクでいろいろ話を聞かせていただくなかで、今までのボランティア活動では経験できなかったような深い悲しみや苦しみを聞かせていただき、さらに臨床宗教師というものの必要性を強く感じるようになりました。本当に素晴らしい研修に参加させて頂いたことに心より感謝申し上げます。

ここで学ばせて頂いたことを、これからの気仙沼での活動に活かしていきたいと思っております。その為には皆様と協力、宗教間協力というのは欠かせないものであると学ばせていただきました。このタイミングで、そして皆様と一緒に勉強できたことが、本当にありがたいことだと思います。本当にありがとうございました。



金子史朗（孝道山本仏殿）

横浜の孝道山から参りました金子です。研修は三回きりでしたけれども、本当に宗教者としてどうやって社会問題にとりくんでいけばいいか、また、どういう心構えでやっていけばいいかということを本当に教えていただきました。実習でも、体験したことのないことを、患者さんやご家族、医師や看護師さんからも教わり、そして何よりも宗教、宗派を超えてこうやって皆様と出会えたことに本当に感謝しております。変わっている坊さんは私だけかと思っていたら、そんなことはなかった（笑）。皆さんのように素敵な人たちと出会えて本当によかったと思っています。ありがとうございました。



李 明信（在日大韓基督教会）

山形から来ました。在日大韓山形教会の牧師として勤めています。日本に来て学んだのが現場主義だったので、教会の中でいろんな問題を持った方々にむきあって、いろんなことをやってきました。震災のことで海外からの要請があつて、案内したり、ボランティアをやったりしてきて、これも教会の外側の仕事なんですけれども、日本をわからなければならぬんだなと思い、今回宗教とかかわっている皆さんとつきあって、やっと日本の状況、日本の宗教の状況が少し分かるようになりました。今、拘置所とか病院、いろんなところでボランティアをやっているの、これから宗教者としての仕事

をするのに役に立つのではと思います。皆さんにいろいろなことを教えていただきました。感謝します。



五辻文昭（真宗大谷派）

今回参加の六十代トリオの（笑）副会長（笑）です。私今回ここに参加する以前に臨床宗教師という言葉についてのイメージがございましたけれども、第一回目の研修でそれが打ち壊されて、それがまあ少しショックでありました。「ひょっとしたら三回目までもたんのかなあ……」まあ、そういう思いをいたしておりました。そういう中で、いろんな宗教の方がたくさん来ておられて、それぞれ宗教家の本分って一体なんだ？と、そのことを本当に真摯に、意欲的に、明らかにしようとしておられた。そういう姿に非常に強い刺激を受けました。なんとかかんとか、三回目まで続けることができました。これはまあ、三回目まで修了しても、先ほどの方も言うておられましたけれども、ほんの入り口に立ったばかりだなと、そんな感じがいたします。それこそ臨床宗教師という、胸を張ってと申しますか、そのことをはっきりと名乗れるような、そういう歩みをこれから続けていきたいと思っています。本当にありがとうございました。



谷山洋三（東北大学准教授）

仙台から来ました谷山といいます（笑）いやいや……皆さん本当にいろんな学びがあったということで、安心しております。大変うれしいです。結構このプログラムはむちゃぶりが多いんですね。30分以内に風呂に入れ、ですとか（笑）、一分以内に喋れとか（笑）、とにかく現場に行けとか。そういう無理強いを山ほどするような、とんでもないプログラムなんですけれども、よくこれに耐えていただき、で、なおかつ、いろんな学びがあったということをお聞きしまして大変うれしく、「よっしゃー！」（ガッツポーズ）という感じですね、はい。というわけで、何人かおっしゃってましたけれども、このプログラムはあくまでも入口です。これから始まるということです。研修の「修了」って言う言葉は、「修め」「了る」、もしくは完全に「終わり」というようなニュアンスで理解されがちですが、この研修については全くそのようなことはなくて、ただの「入門」です。これから、ということで、皆さんの活躍を期待しております。



アメリカ視察報告 チャプレンと臨床宗教師

実践宗教学寄附講座准教授
高橋 原

2014年2月20日～27日に、谷山洋三准教授とともに、チャプレン養成をめぐる諸事情を視察するためにアメリカへの出張を行なった。以下では、訪問先と得られた成果について簡単に報告する。なおこの出張は東北大学総長裁量経費によるものである。東北大学のご理解とご支援に感謝申し上げる。

1. ナローパ大学

2月21日に最初に訪問したのは、前号で紹介したナローパ大学（コロラド州ボルダー）であった。同大学は1974年にチベット仏教指導者のチョギヤム・トウルンパによって設立された米国最初の仏教系大学であり、大学院に仏教チャプレンの養成課程(Master of Divinity)を設置している。

まず、午前中に、Elaine Yuen教授による授業、Contemporary American Religionsを参観した。



この日は参加学生によるバハイ教を紹介する発表があったが、それとは別に、前年に逝去したRoger Dorris教授を偲び、野外の駐車場横のスペースに置かれた簡易な祭壇であるTransition Shrineにおいて追悼の祈りを捧げる機会がもうけられた。Transitionとは仏教的な「無常」を表わす言葉であるが、特に仏教儀礼のようなことをするのではなく、真鍮製のプレートとともに小さな仏頭が置かれた祭壇に向かって、各自が思い思いの言葉を述べた。

続いて、Judith Simmer-Brown教授にキャンパス内を案内していただいた。チベット仏教のタンカを前に50人

ほどが座れるようになっているMeditation Hall、チョギヤム・トウルンパが愛したという茶室など、随所に東洋の宗教への敬意が感じられた。



午後には、同大学のMDiv Colloquium: Sycamore Conference Roomにおいて、教員と大学院生を前に、下記のプレゼンテーションを行なわせていただいた。

Yozo Taniyama, “Vihāra: Buddhist Hospice Movement and Chaplaincy in Con-temporary Japan”

Hara Takahashi, “Who Listens to Their Stories? How Religious Professionals Are Dealing with Occult Phenomena in the Disaster Area of the Great East Japan Earthquake”



次に、非常に有意義なことに、仏教チャプレン養成課程に義務づけられているCPE(Clinical Pastoral Education＝臨床牧会教育)の実習を経験した学生の方々にお話をうかがうことができた。昨年の夏に各地の病院等の施設で終えた、1ユニット3ヶ月（400時間）の研修で学んだこととして挙げてくださった内容をいくつか紹介する。

- ・権威を持った宗教的専門職として振る舞う自信。
- ・人々の前でどのように自分でいられるか。
- ・チャプレンであることとは与えることではなく、一生をかけて学び、修行すること。
- ・何をすべきかは患者さんに聞けばよいことである。

・医療チームの一員であることが、スピリチュアルケアを行なう上で重要であるということ。

・自分が人のためになる働きができるという自信。

これらは、宗教者として必要とされているという実感が自信につながったという感想が臨床宗教師研修の修了者からしばしば聞かれるのと相通じる。

興味深かったのは、米国でのチャプレンという仕事の認知のされ方が、我々が想像していたのとは若干ズレているらしいということであった。「チャプレンです」と名乗ると「私は死ぬんですか？」という反応が返ってきたり、悪い報せを聞かされると警戒されたりして、チャプレンの役目(話を聞くこと、そばにいて支えること)を説明しなければならないことがしばしばあるという。ここから、米国の病院チャプレンを理想化して、僧侶の存在自体が忌避される日本の病院の状況を嘆くという見方には、もう少し含みを持たせた方がよいことがわかる。

また、高齢者ほどチャプレンのことを知っているが、それは戦争の記憶によるものであり、それほどチャプレンと軍隊のイメージの結びつきは強いという。軍隊や退役軍人病院では、チャプレンは宗教者ではあるものの、士官階級に位置づけられる軍組織の一員であるということも付言しておく。

すべての病院で専属のチャプレンが雇用されているというのも誇張されたイメージである。小規模な病院ではそのようなことはなく、近隣の引退牧師がボランティアで通って来ているというケースも少なくないようである。

話をうかがった大学院生達は仏教チャプレンであり、ケア対象者の多くはキリスト教徒であったが、そのことが仕事の妨げとなったという経験はなかったようである。現場に出る時にはせいぜい数珠を持つ程度であり（宗教宗派を示すものを身につけてはならないと指示されることもある）、たいていはチャプレンだからキリスト教徒だと思われている。祈ってくれと言われればそれに応じるし、特に仏教徒であると名乗る必要を感じることもない。た

だし、プロテスタント流の即興的な祈りでは、「主よ」と始めながらも、仏教的な内容になることが多いという。このことは、日本人が僧侶の宗派をほとんど気にかけず、ただお坊さんの格好をした人がお経を唱えてくれればありがたいと思うという状況と似ているかもしれない。

病室でどのように自己紹介をするのかという質問に対しては、単に名前を伝えるという答えの他、「チャプレンです」あるいは「スピリチュアルケアをする人です」という答えなどがあつた。軍施設では階級を明示するために「チャプレン・インターン」であると言わなければならないという。

仏教徒だとわかったらキリスト教への改宗を勧められたという笑い話もあり、逆に、キリスト教の話は聞きたくないと言った人が敬遠していた人が、仏教徒ならいいと歓迎してくれたという話も聞いた。また、チャプレンの名札を付けて近づいていくと入院患者の談笑が止まったという経験談は示唆的であつた。我々は、医療スタッフとは異なる立場で対象者に寄り添う存在である臨床宗教師がすべての医療機関に配置されるという理想を語ってきたが、臨床宗教師が医療組織の中に組み込まれて権威を与えられてしまうと、かえって本来の理念から隔たってしまうという可能性もあるだろう。

スタッフのケアということについてもうかがった。清掃などの雑務を行なっているのはさまざまな国からの移民であることが多く、彼らは人種的、文化的な問題を抱えているという。チャプレンがそのような人々の話し相手になることもある。これは日本の状況に直接当てはまるものではないが、職種や役割の数だけ悩みも存在するという意識は日本の諸施設で活動する臨床宗教師にも必要なことである。

ナローパ大学の視察にあたり、大学院在籍中の古村文伸氏に大変お世話になった。また、時間調整をして我々を歓迎してくださったCharles G. Leaf学長をはじめ、大学関係者の皆様に感謝申し上げる。

2. アトランタ

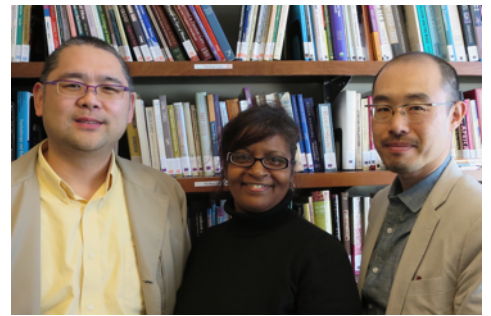
ジョージア州アトランタに移動し、23日には、Antoinette Kemp牧師のご案内で、プロテスタントのディサイプル派(Disciples of Christ)に属するRay of Hope教会の日曜礼拝を見学させていただいた。この教会はいわゆる黒人教会であり、大きなホールのステージ上ではバンド演奏が繰り広げられ、ゴスペルのコーラスが響き渡っていた。説教師の呼びかけに対して参列者が熱烈に応答し、前に進み出て涙とともに身を横たえる人々を皆で祝福するというクライマックスは、映画などでよく知っている光景であつたが、やはり生で見ると鮮烈な印象が残った。我々は参列者から次々とハグの歓迎を受けて教会を後にした。



Cynthia L. Hale牧師

教会のメンバーの方々は、自分たちが「進歩的な教会」であると語り、この日はネルソン・マンデラを讃える寸劇が上演された。若者の参列者も多く、確かに教会が、押しつぶされるような悲しみを抱えながら暮らしている人々の支えとなっていることが感じられた。もっとも、同様の生活を送っているもっと多くの若者たちがおり、彼らが教会に顔を出すことはないというのもう一つの現実であろう。

24日には、Kemp牧師とともに、エモリー大学で牧会神学の教授をしているEmmanuel Lartey牧師を訪問した。両牧師とは、昨年9月に仙台で行なわれた国際パストラルケア学会以来の縁であるが、ともに超宗教・宗派での臨床宗教師養成の試みの必要性を痛感しておられ、“interfaith chaplain”の可能性と問題点について、さまざまな角度から意見交換することができた。またKemp牧師は大手食肉加工会社でチャプレンを務めているので、企業チャプレンの仕事についても詳しくうかがうことが出来た。



Kemp牧師と

続いて、エモリー大学近くに位置するACPE(the Association for Clinical Pastoral Education)のオフィスを表敬訪問した。Executive DirectorのDr. Trace Haythornに東北大学の臨床宗教師研修のあらましを紹介し、将来的な提携の展望について話すことができた。



Larty牧師(左)、Haythorn氏(右)

そしてこのオフィスで偶然にも、CPEの創始者Anton Boisen(1876-1965)と臨床宗教師研修の創始者谷山洋三師の歴史的出会いが実現することとなった。



米国出張の最後に訪れた米軍チャプレンミュージアム(サウス・カロライナ州フォートジャクソン)も印象深い場所であつたが、紙幅が尽きたのでそれについては稿を改めたい。



チャプレンアシスタントの訓練生達
銃を携行している

各地の動き

臨床宗教師各地方支部の動向

活動を始めた臨床宗教師関西支部、九州支部の動きを中心にお伝えします。

関西支部定例会

第1回

日時：平成26年1月31日（金）

場所：ビハーラ21 総本部

参加者：谷山先生、吉田師（1期）、宇崎師（1期）、羽富師（2期）、清水師（4期）、金田師（4期）、三浦（ビハーラ21）、他僧侶2名、スピリチュアルケア専門職1名、一般2名、計12名

内容：会話記録の発表及びグループワーク

第2回

日時：平成26年2月28日（金）

場所：ビハーラ21 総本部

参加者：吉田師（1期）、宇崎師（1期）、羽富師（2期）、三浦（ビハーラ21）、他僧侶2名、スピリチュアルケア専門職1名、一般2名、計9名

内容：朝日新聞のインタビュー、今後のフォローアップについて検討

第3回

日時：平成26年3月28日（金）

場所：ビハーラ21 総本部

参加者：打本先生、羽富師（2期）、佐々木師（2期）、清水師（4期）、三浦（ビハーラ21）、他僧侶3名、スピリチュアルケア専門員1名、一般10名、計19名及び取材者4名

内容：「臨床宗教師とビハーラ」についての概要説明（三浦）、参加者全員の活動報告



◆参加者からの活動報告は、非常に有意義だと感じました。新しい発見が多々あります。時間配分が難しいですが、今後は、各自の報告が一方通行にならないよう意見交換できるような配慮をしたいと考えます。臨床の場では宗教者は孤立してしまいがちで、医療者や介護職員の顔色をツツツツ気になってしまう傾向があると思います。患者さんや利用者さんとの関わり以上に、現場のスタッフとの関係性が重要になってきます。そんな各自の課題を発表しあえる会合にしていきたいと思っています。（ビハーラ21 三浦紀夫）

九州支部

日時：平成26年2月1日（土）

場所：真宗大谷派熊本教務所（熊本東本願寺会館）

内容：第一回臨床宗教師入門講座（谷山洋三講師）

参加者：宗教者17名、医療・福祉関係10名、傾聴ボランティア等その他が13名、計40名

◆宗教者は、浄土真宗木辺派、浄土真宗本願寺派、真宗大谷派、本門法華宗、真言宗系等の方が来られていました。医療・福祉関係の方は、在宅専門の医院長、福岡・熊本に病院を展開しておられる医療法人役員、看護師、ケアマネージャー等でした。いずれも自らがケアについて学びたいという事とこれからどのような様な連携が出来るのか共に勉強したいと申されていました。

今後の予定

日時：4月12日

場所：真宗大谷派浄玄寺

内容：フォローアップ研修（谷山洋三講師）

日時：5月17日

場所：日本福音ルーテル熊本大江教会

内容：第二回臨床宗教師入門講座（伊藤文雄講師）

尚、フォローアップ研修は臨床宗教師のみ対象ですが、入門講座は今の所多くの方に私達の活動を知って頂きたいと対象を絞らず公開講座にしています。

被災地や終末期医療の現場で心のケア

「臨床宗教師」九州にも

支部発足 来月、熊本で講座

宗教・宗派を超え 悲しみに耳傾ける

朝日新聞熊本版（2014年2月1日）

その他の活動

日時：3月23日

場所：熊本県立美術館別館

内容：子どもたちの3.11「ユニセフ東日本大震災報告写真展」現地報告会にて、講話「震災と心のケア宗教者としての歩み」（糸山光照）

日時：3月24日

場所：熊本市流通情報会館

内容：第一回南区在宅医療・介護にかかわる多職種連携研修会に参加。約200名程の参加者が20班に分かれ意見交換をし、名刺の交換もありました。地域で活躍されている病院長や熊本市医師会の在宅看護・介護ステーションの責任者、地域包括支援センターの方とも話が出来ました。

日時：3月25日

場所：独立行政法人国立病院機構・熊本医療センター

内容：中央区研修会に臨床宗教師の資料を持って参加。視察に来られていた熊本市長に臨床宗教師とその活動について説明。行政は在宅医療・介護の普及に力を入れており、臨床宗教師の存在がその普及の為には有益だと認識して頂き、多職種連携の枠の中に入れて頂けるよう努力して行かなければと思いました。

色々と広報活動をしていますが、行く先々で興味を持って下さる方々がいらっしゃり、思ったより求められていると感じます。そう思えば思う程、その期待を裏切らない様な質の向上に努め、定着させなければと思います。また、本当に実働するとなると人材不足で、今後、活動を活発にしていこうには、早急な人材の養成が必要だ痛感しております。

(吉尾天声)

関東支部

日時：2月4日

場所：普門館」会議室

内容：臨床宗教師研修修了者など11名が集まり、勉強会を行いました。相互交流により、臨床宗教師としての今後の活動を考え、実践していくための再考の機会になりました。

スピリチュアルケア講座
実施報告

2014年1月より、TKPガーデンシティ仙台勾当台を会場に、3回にわたり、実践宗教学寄附講座主催のスピリチュアルケア講座を実施しました。

第1回

2014年1月6日

講師：伊藤高章（桃山学院大学教授）

「チーム医療におけるスピリチュアルケア」



伊藤高章先生



小西達也先生

第2回

2014年2月18日

講師：小西達也（武蔵野大学教授）

「専門職チャプレンから見たスピリチュアルケアの基礎と応用」

第3回

2014年3月17日

講師：谷山洋三（東北大学准教授）

「臨床宗教師のスピリチュアルケア」



この連続公開講座はスピリチュアルケアに関心のある専門職を対象として開催されました。仙台市付近の方々を中心に、県外からの来場者もあり、のべ100名前後の方々が聴講されました。約90分の講義とそれに続く質疑応答の内容は、後日、講演録の形で出版される予定です。

活動報告

《2014年度前期開講科目》

授業名：臨床死生学

担当者：谷山洋三

内容：様々な死生観を通して自分自身の死生観を涵養し、医療・福祉の臨床における死に関する諸問題について学ぶ。

受講者数（概数）：30（文学部25、大学院文学研究科6）

授業名：宗教心理学入門

担当者：高橋原

内容：アメリカの回心研究、ウィリアム・ジェイムズの宗教論、フロイト、ユング等の精神分析的宗教論など、宗教心理学の学説史を概観しながら、人間心理を切り口にして、宗教を信じる、あるいは宗教によって救われるとはどのような現象なのかを考える。

受講者数（概数）：120（文学部、教育学部、法学部、大学院文学研究科）

授業名：実践宗教学基礎実習（大学院・学部共通科目）

担当者：谷山洋三・高橋原

内容：第5回臨床宗教師研修を実地観察し、各自の問題関心に基づいて設定したテーマを研究する。

受講者数（概数）：7（文学部5、大学院文学研究科1、文学部研究生1）

《発表・講演》

11月30日 鈴木岩弓「東日本大震災からの復興 —『心のケア』をめぐる—」在メダン日本国総領事館特別講演、在メダン日本国総領事館

12月2日 鈴木岩弓「東日本大震災後の伝統芸能」アチー日本フォーラム、Meulaboh City Hall

12月11日 鈴木岩弓「東日本大震災と『臨床宗教師』」教派神道連合会「いのちの重さを考える 5」講演会、神道大教本局

12月13日 鈴木岩弓「霊と肉と骨—東日本大震災直後の土葬の採用—」平成25年度東北学院大学教養学部講演会、東北学院大学教養学部

2月24日 鈴木岩弓「被災地と宗教—東日本大震災から三年—」国際宗教同志会平成26年度総会記念講演会、金光教泉尾教会神徳館国際会場

3月7日 鈴木岩弓「東日本大震災医被災地の復興と宗教」新日本宗教団体連合会「東日本大震災・新生復興祈念集会」、コラッセふくしま

3月9日 鈴木岩弓「『臨床宗教師』養成プログラムの開発と社会実装」東北大学災害復興新生研究機構シンポジウム、ウェスティンホテル仙台 グランドボールルーム

3月16日 鈴木岩弓「庶民に根差す『ころり信仰』—各地に見る実際—」日本リビングウィル研究会東北地方会 基調講演、せんだいメディアテーク スタジオシアター

11月28日 谷山洋三”Education Program for Rinsho-Shukyo-shi (Japanese-style Interfaith Chaplains)”、国際交流基金「平成25年度東南アジアムスリム知識人グループ招聘プログラム・宗教的精神を基盤として関係構築」講義

12月7日 谷山洋三「『いのち』に寄り添う宗教者」日本学術会議公開シンポジウム「3.11後の『いのち』を語る言葉を考える」日本学術会議講堂

12月21日 谷山洋三「悲しみに寄り添う」真宗大谷派山形教区第六組同朋研修、願善寺、講師

12月22日 谷山洋三「スピリチュアリティについて」東北大学復興アクション100+東北大学大学院教育学研究科主催「心的外傷後成長（PTG）について考える」シンポジウム（第1部）、仙台国際センター

1月20-21日 谷山洋三「臨床宗教師の意義」「死の体験シミュレーション」「死の体験の傾聴」曹洞宗宮城県布教師協議会平成25年度布教実践講習会、ホテルニュー水戸屋

2月1日 谷山洋三「臨床宗教師のスピリチュアルケアと宗教的ケア」臨床宗教師入門講座、真宗大谷派熊本教務所

2月4日 谷山洋三「電話相談の基礎と応用」臨床宗教師会関東支部、普門館

2月7日 谷山洋三「臨床宗教師の意義」社会福祉法人道志会特別養護老人ホーム職員研修

2月7日 谷山洋三「臨床宗教師の意義」社会福祉法人星谷会星谷学園職員研修

2月20日 谷山洋三”Vihāra: Buddhist Hospice Movement and Chaplaincy in Contemporary Japan,” Colloquium of MDiv Course, Naropa University, USA

2月28日 谷山洋三「スピリチュアルケアのむかうさき これからの展望」第24回「いのち」をめぐる連続講演会、新潟県立がんセンター新潟病院

3月7日 谷山洋三「境界を越える宗教者—死者と生者、信仰の違い—自分の枠—」東京大学総長裁量経費第2回「Sustainabilityと人文知」研究プロジェクト主催シンポジウム、東京大学

3月17日 谷山洋三「臨床宗教師のスピリチュアルケア」実践宗教学寄附講座主催第3回スピリチュアルケア講座、TKPガーデンシティ仙台勾当台

1月15日 高橋原「臨床宗教師の現在と課題」お寺MEETING vol. 6 「最新〈臨床宗教〉事情～なぜ僧侶に心のケアが必要なのか」、於浄土宗應典院、2014年1月15日。

2月21日 高橋原 “Who Listens to Their Stories? How Religious Professionals Are Dealing with Occult Phenomena in the Disaster Area of the Great East Japan Earthquake,” Colloquium of MDiv Course, Naropa University, USA

《論文・寄稿》

鈴木岩弓「震災からの復興にみる宗教のちから」『コルモス・シリーズ 第59回研究会議報告』現代における宗教の役割研究会、4-37頁。

谷山洋三「宗教的ケアにおける教化の二側面 <既信者教化>と<未信者教化>」『仏教看護・ピハール』8号、2013年、76-88頁。

谷山洋三 Yozo Taniyama and Carl B. Becker, Religious Care by Zen Buddhist Monks: A Response to Criticism of “Funeral Buddhism”, in Journal of Religion & Spirituality in Social Work:

Social Thought, 33: 1-12, 2014.(published online)

谷山洋三「臨終ケアと担い手」日本仏教社会福祉学会編『仏教社会福祉入門』法蔵館、2014.3.31、pp.89-94

高橋原「「心の相談室」の活動と臨床宗教師構想—現状と展望—」『宗教と現代がわかる本 2014』渡邊直樹責任編集、平凡社、2014年、44-49頁。

高橋原「誰が話を聴くのか？—被災地における霊の話と宗教者」『死生学年報2014』東洋英和女学院大学死生学研究所、2014年、237-254頁。

高橋原「宗教者による心のケアの課題と可能性—臨床宗教師養成の試み—」『宗務時報』117、文化庁、2014年、27-44頁。

《新聞報道等》

日本海新聞（2013年12月17日）他（共同通信）

再考 ポスト3.11

悲しみに寄り添う

「臨床宗教師」養成の試み 宗派超え連携

朝日新聞（2013年12月31日）

文化

幽霊を心のケアに 話すことで、不安和らぐ（宮本茂頼）

上毛新聞（2014年1月14日）

安中・実相寺 喪失感いまだ深刻

前住職の井出さん被災者ケアを語る

中外日報（2014年1月23日）

傾聴に取り組む僧侶たち

日常に溶け込むように

聞き屋・吉田敬一さん

河北新報（2014年1月30日）

宗派超え心ケア

「臨床宗教師」九州でも養成

熊本・来月講座

毎日新聞西部朝刊（2014年1月31日）

ニュースボックス：熊本で「臨床宗教師」入門講座

月刊『Sogi』No.139（2014年1月）

～a voice of faith～聴聞

愛娘の導きで仏の道を歩き続ける「臨床宗教師」、吉田敬一さんの思い

受けたご恩に報いたい

空回りした熱意と二度目の大震災

自然体で「おせっかいな近所の兄ちゃん」に

（太田宏人）

朝日新聞熊本版（2014年2月1日）

被災地や終末期医療の現場心のケア

「臨床宗教師」九州にも

支部発足・きょう熊本で講座

宗教・宗派超え 悲しみに耳傾ける

（成田太昭）

【TV】BSフジ（2014年2月23日）

『現代社会×宗教 表現する宗教者たち』

中外日報（2014年2月25日）

（論・談）

臨床宗教師研修の体験から学ぶ —「良かった」の気持ち共有

傾聴ボランティア「聞き屋」代表 吉田敬一氏

京都新聞（2014年2月27日）

心癒やす「臨床宗教師」育て 龍谷大が今春、養成プログラム

MSN産経west（2014年2月27日）

人々の悲しみに寄り添う「臨床宗教師」養成へ 震災機に龍谷大、西日本初

共同通信47NEWS（2014年2月27日）

龍谷大、臨床宗教師を養成 病院や避難所でお経

医療介護CBニュース（2014年2月28日）

4月から「臨床宗教師」養成、東北大と連携- 龍谷大、全国2例目【敦賀陽平】

新潟日報（2014年3月11日）

緩和ケアに宗教者を

東北大准教授 谷山さん 新潟で講演

信濃毎日新聞（2014年3月11日）

かなしみにの先に 今、死生観は

宗教の力 再評価

「なに、心配ない」お坊さんがいる安心感

（吉尾杏子）

信濃毎日新聞（2014年3月18日）

かなしみにの先に 今、死生観は

臨床宗教師

死の不安 寄り添うことはできる

（吉尾杏子）

朝日新聞大阪夕刊（2014年3月19日）

臨床宗教師関西でも広がり

終末医療・被災地 不安・悲しみ 寄り添う

（岡田匠）

河北新報（2014年3月26日）他（共同通信）

高齢化に伴う多死社会

臨床宗教師の活動期待

（共同通信編集委員 西出勇志）

寄附者

東北大学文学研究科実践宗教学寄附講座は宗教界など各方面からの寄附金によって維持運営されています。寄附者の方々にここに記し感謝申し上げます。

日本基督教団

南西ドイツ宣教会

(EMS: Evangelical Mission in Solidarity)

宮城県宗教学法人連絡協議会

日本ナザレン教団

宗教法人みんなの寺

融通念佛宗音羽山観音寺

浄土真宗本願寺派真覚寺

真宗大谷派常念寺

天台真盛宗新光寺

天台真盛宗西念寺

融通念佛宗西方寺

曹洞宗島田地蔵寺

真言宗智山派大聖寺

日蓮宗実相寺

日蓮宗妙興寺

秩父神社

神習教

念法眞教

日蓮宗立像寺

匿名

公益財団法人世界宗教者平和会議(WCRP)日本委員会

日本キリスト教協議会エキュメニカル震災対策室

財団法人東北ディアコニア

特定非営利活動法人神道国際学会

特定非営利活動法人世界開発協力機構

当講座は、全日本仏教会の「推薦団体」、日本宗教連盟の「後援団体」として認定を受けています。

ご寄附のお申し込みにつきましては下記までお問い合わせください。

東北大学文学研究科内実践宗教学寄附講座

TEL: 022-795-3831 (FAX兼)

E-mail: j-shukyo@g-mail.tohoku-university.jp

編集後記

第2回フォローアップ研修が無事に開催できたことをあらためてお礼申し上げます。主催者としては、様々な人が集まって盛会であったというまとめになってしまいますが、それぞれのお立場から色々なことを感じられたと思います。当講座主催の臨床宗教師研修を修了した方々にとっては、望んでいない他流試合の場に急に引っ張り出されたような感覚を抱かれた方もいたのではないかと感じています。同じ釜の飯を食った者同士で出発点を確認しあう場もちろん大切に、元気の源になるものですが「アウェイ」の環境こそが学びの場となると思います。萎縮することなく、それぞれの現場に戻られてイニシアティブを発揮していただければと思います。(た)



実践宗教学寄附講座運営委員会

学内委員

鈴木岩弓 実践宗教学寄附講座教授(兼任)

谷山洋三 実践宗教学寄附講座准教授

高橋 原 実践宗教学寄附講座准教授

学外委員

[委員長]金田諦應 通大寺住職

井形英絵 日本バプテスト連盟南光台キリスト教会牧師

伊藤文雄 元ルーテル神学校教授

金沢 豊 浄土真宗本願寺派総合研究所研究員

川上直哉 日本基督教団仙台市民教会主任担任教師

(財)東北ディアコニア理事長

小西達也 武蔵野大学教授

櫻井恭仁 心の相談室理事(財務担当)

佐藤央千 竹駒神社権禰宜

篠原祥哲 (公財)世界宗教者平和会議(WCRP)日本委員会

仙台事務所所長

松山宏佑 昌林寺住職

宮崎正美 仙台白百合女子大学教授

伏見英俊 智山伝法院非常勤教授

篠原鋭一 長寿院住職(顧問)

(事務補佐員) 佐藤千尋

980-8576 宮城県仙台市青葉区川内27-1

東北大学文学研究科内

実践宗教学寄附講座

022-795-3831(T/F)

j-shukyo@g-mail.tohoku-university.jp



東北大学

東北大学実践宗教学寄附講座ニュースレター第5号

編集・発行 東北大学大学院文学研究科実践宗教学寄附講座

2014年5月1日(第1刷)

(このニュースレターは右記ホームページからも閲覧できます。)